

⑬ 日本国特許庁(JP)

⑭ 実用新案出願公開

⑫ 公開実用新案公報(U)

昭62-63480

⑮ Int.Cl.⁴

識別記号

庁内整理番号

⑯ 公開 昭和62年(1987)4月20日

F 16 K 31/70

B-7181-3H

審査請求 未請求 (全 頁)

⑰ 考案の名称 感温性複式切替弁

⑱ 実 願 昭60-156973

⑲ 出 願 昭60(1985)10月14日

⑳ 考 案 者 坪 井 勝 大府市共和町1丁目1番地の1 愛三工業株式会社内
㉑ 出 願 人 愛三工業株式会社 大府市共和町1丁目1番地の1
㉒ 代 理 人 弁理士 長谷 照一 外1名

明 細 書

1. 考案の名称

感温性複式切替弁

2. 実用新案登録請求の範囲

有底筒状をなし内部に弁室を形成するバルブケースと、このバルブケースの内周面に軸方向に間をおいて開口された複数のポートと、前記内周面に摺接する弁体と、この弁体を軸方向に移動させて前記各ポートの連通状態を切り替える熱応動部材を備えてなる感温性複式切替弁において、有底筒状をなし内部に感温室を形成すると共にその底部中央には同感室内に突出する細長い棒状の放熱突起が一体的に設けられかつその開口端縁において前記バルブケースの開口端縁と結合された感温部ケースを備え、前記熱応動部材は互に異なる変態温度を有する形状記憶合金よりなり互に異なるコイル巻径を有すると共に互に同軸でかつ半径方向に重合して配置された複数のスプリング及び隣接する前記スプリングの間に介在して一端に形成した内向折曲部に前記隣接するスプリングの

うち内側のものの一端側を係止すると共に他端に形成した外向折曲部に同隣接するスプリングのうち外側のものの他端側を係止して前記複数のスプリングを直列接続するガイドより構成され、同熱応動部材は最小巻径の前記スプリング内に前記放熱突起を挿入して前記感温室内に位置しかつ前記直列接続された複数のスプリングの両端を介して前記弁体と感温部ケースの底部との間に介装されていることを特徴とする感温性複式切替弁。

3. 考案の詳細な説明

〔産業上の利用分野〕

本考案は複数の設定温度を有し、各設定温度に達する毎に複数のポートの連通状態を順次切り替える感温性複式切替弁に関し、例えば自動車用エンジンの温度に応じて吸気系、排気系、点火系等を制御するのに適したものである。

〔従来技術〕

この種の感温性複式切替弁としては、例えば特公昭58-52113号に開示されている如く、ワックス型サーモスタットを用いたものがある。

〔 考案が解決しようとする問題点 〕

しかしながら、上記従来技術において感温材料として用いられるワックスは熱の不良導体であるので応答速度が遅く、またワックスが洩れれば作動不良の原因となるという問題がある。此等の問題を解決するために変態温度が異なる形状記憶合金よりなる複数のスプリングを直列に接続して熱応動部材を構成し、これにより各変態温度に達する毎に弁体を移動してポートの連通状態を切り替えることが考えられる。しかしながら、複数のスプリングを直列接続すれば全体として長さが大となるので感温部が大型になり、またそのため感温材料として感温材料として熱の良導体である金属を使用したにも拘らず予期した程応答速度も向上しないという問題が生ずる。本考案は形状記憶合金よりなる複数のスプリングの配置及びケースの放熱構造を工夫して上記各問題を解決すると共に一層応答速度を向上させたものである。

〔 問題点を解決するための手段 〕

このために、本考案による感温性複式切替弁は、

添付図面の実施例に例示する如く、有底筒状をなし内部に弁室Bを形成するバルブケース20と、このバルブケースの内周面22に軸方向に間をおいて開口された複数のポート24a～24eと、前記内周面22に摺接する弁体30と、この弁体を軸方向に移動させて前記各ポート24a～24eの連通状態を切り替える熱応動部材40を備えてなる感温性複式切替弁において、有底筒状をなし内部に感温室Aを形成すると共にその底部12中央には同感室内に突出する細長い棒状の放熱突起13が一体的に設けられかつその開口端縁11において前記バルブケース20の開口端縁21と結合された感温部ケース10を備え、前記熱応動部材40は互に異なる変態温度を有する形状記憶合金よりなり互に異なるコイル巻径を有すると共に互に同軸でかつ半径方向に重合して配置された複数のスプリング41、42、43及び隣接する前記スプリングの間に介在して一端に形成した内向折曲部45a、46aに前記隣接するスプリングのうち内側のもの42、43の一端側42a、

4 3 a を係止すると共に他端に形成した外向折曲部 4 5 b , 4 6 b に同隣接するスプリングのうち外側のもの 4 1 , 4 2 の他端側 4 1 b , 4 2 b を係止して前記複数のスプリング 4 1 , 4 2 , 4 3 を直列接続するガイド 4 5 , 4 6 より構成され、同熱応動部材は最小巻径の前記スプリング 4 3 内に前記放熱突起 1 3 を挿入して前記感温室 A 内に位置しかつ前記直列接続された複数のスプリング 4 1 , 4 2 , 4 3 の両端 4 1 b , 4 3 a を介して前記弁体 3 0 と感温部ケース 1 0 の底部 1 2 との間に介装されていることを特徴とするものである。

〔作用〕

感温部ケース 1 0 の温度が上昇するにつれて各スプリング 4 1 , 4 2 , 4 3 の温度は、感温部ケース 1 0 内の雰囲気温度、底部 1 2 からの熱伝導及び輻射並びに放熱突起 1 3 からの輻射により次第に上昇し、その温度が逆変態温度を越える毎に各スプリング 4 1 , 4 2 , 4 3 は順次変形して弁体 3 0 を順次軸方向に移動させ、切替シール部 3

0 aにより各ポート24 a～24 eの連通状態を順次切り替える。この状態から温度が低下すれば、各変態温度以下となる毎に弁体30は順次上記と逆方向に移動され、各ポート24 a～24 eの連通状態を逆方向に順次切り替える。

〔考案の効果〕

本考案は各スプリングのコイル径を異なるものとし互に同軸でかつ半径方向に重合して配置し、ガイドにより互に直列に接続したので、各スプリングとガイドよりなる熱応動部材の長さが全体として短くなり感温部ケースを小型化することができる。また、上記構成により各スプリングの一端側が感温部ケースの底部に接近するので熱伝導及び軸射による感温部ケースから各スプリングへの伝熱が良くなり、特に感温部ケースからの熱伝導及び輻射による伝熱が最も少ない最小巻径のスプリングは放熱突起との間の輻射及び対流により熱交換がなされて伝熱の不足が補われるので、各スプリング自体の熱伝導性が良いことと相まって感温性複式切替弁の応答性を大幅に向上させるこ

とができる。

〔実施例〕

以下に、添付図面に示す実施例の説明をする。

第1図に示す如く、感温部ケース10は全体として有底筒状をなしてその内部に感温室Aを形成し、底部12側の外周には感温対象、例えば自動車用エンジンの冷却水ジャケットの外壁60に螺合される雄ねじ15が形成され、底部12が冷却水に接するようになっている。底部12の中央には、感温部ケース10と同軸かつ一体に感温室A内に突出する細長い棒状の放熱突起13が形成されている。バルブケース20も全体として有底筒状をなし、弁室Bを形成する円筒状の内周面22には5個のポート24a～24eが軸方向に間をおいて開口され、各ポート24a～24eに連通する通路を形成する接続管25a～25eがバルブケース20と一体に設けられている。感温部ケース10は真鍮等の金属により成形され、またバルブケース20はポリブチレンテレフタレート等の合成樹脂により成形されている。両ケース10、

20は、バルブケース20の開口端縁21を感温部ケース10の開口端縁11に形成した薄肉の筒部14内に挿入し、筒部14の先端を巻き締めすることにより互に結合され、この結合部の一部には感温室Aと外部を連通する通気孔26が設けられている。

弁室B内に軸方向移動自在に設けられた弁体30は、第1図に示す如く、ゴム等の柔軟弾性体を筒状に形成した弁本体31、弁本体31の内側に一体に焼付接着されたステンレス等の金属板よりなる補強筒32、弁本体31及び補強筒32の下部に嵌着されたりテーナ33より構成されている。弁本体31の上下部には、それぞれバルブケース20の内周面22に弾性的に摺接する環状の切替シール部30a及び遮断シール部30bが一体に形成され、上部の切替シール部30aは弁体30の軸方向移動により各ポート24a～24eの連通状態を切り替え、下部の遮断シール部30bは各ポート24a～24eの切替えを行うことなく弁室Bと感温室Aの連通を常に遮断するようにな

っている。弁体 30 は、補強筒 32 下部の内向フランジとバルブケース 20 の底部 23 の間に介装された、ピアノ線等の通常のばね材料よりなるバイアススプリング 50 により、後述の熱応動部材 40 に向けて付勢されている。

第 1 図に示す如く、感温部ケース 10 の感温室 A 内には、その底部 12 と弁体 30 のリテーナ 33 の間に介装される熱応動部材 40 が設けられている。熱応動部材 40 は、互に異なる変態温度を有する形状記憶合金よりなり互に異なるコイル巻径を有する 3 個のコイル状のスプリング 41, 42, 43 及び此等を接続する 2 個の筒状のガイド 45, 46 により構成されている。第 1 図に示す如く、第 1 スプリング 41 は最大のコイル巻径を、また第 3 スプリング 43 は最小のコイル巻径を有し、各スプリング 41, 42, 43 は互に同軸でかつ多少の隙間をおいて半径方向に重合して配置されている。筒状の第 1 ガイド 45 は第 1 及び第 2 スプリング 41, 42 の半径方向隙間内に、また第 2 ガイド 46 は第 2 及び第 3 スプリング 42,

43の半径方向隙間内に配置され、ガイド45、46の一端に形成した内向折曲部45a、46aにはスプリング42、43の一端側42a、43aに係止され、またガイド45、46の他端に形成した外向折曲部45b、46bにはスプリング41、42の他端側41b、42bに係止され、かくして第1～第3スプリング41、42、43は第1及び第2ガイド45、46を介して直列に接続されている。なお、各スプリング41、42、43のばね常数はほぼ同程度とし、また各ガイド45、46の円筒部には感温室A内の空気の流通を良くするために多数の通気孔を設けておく。熱応動部材40は、放熱突起13が第3スプリング43内に挿入されるようにして感温部ケース10内に挿入され、第1スプリング41の一端41aと第3スプリング43の他端43bをそれぞれ感温部ケース10の底部12と弁体30のリテーナ33に当接して両部材10、30の間に介装されている。各スプリング41、42、43と感温部ケース10、放熱突起13及び各ガイド45、4

6の間には僅かの隙間を設けるものとする。

本実施例においては、第1～第3スプリング41, 42, 43を形成する形状記憶合金の逆変態温度はそれぞれ $T_1 (= 30^{\circ}\text{C})$, $T_2 (= 50^{\circ}\text{C})$, $T_3 (= 60^{\circ}\text{C})$ とし、低温においては長さが短かく、温度が上昇して各逆変態温度を越えればバイアススプリング50に抗して長さが増大し、この状態から温度が低下して各変態温度以下となればバイアススプリング50により長さが短くなるものを使用している。しかして T_1 以下の低温状態においては、第1～第3スプリング41, 42, 43はバイアススプリング50により圧縮されて、第1図に示す如く、各ガイド45, 46の一端の折曲部45a, 46aは感温部ケース10の底部12に当接し、他端の折曲部45b, 46bはリテーナ33のフランジ部33aに当接し、また弁体30の環状の切替シール部30aは第1ポート24aと第2ポート24bの間に位置している。



次に本実施例の作動につき説明すれば、感温部ケース10及び感温室A内の第1～第3スプリング41, 42, 43の温度が T_1 以下の状態では、第5図に示す如く弁体30のストロークは0である。制御対象である冷却水ジャケットの外壁60及び内部の冷却水温度の上昇により感温度ケース10の温度が上昇すれば感温室A内の雰囲気温度、底部12からの熱伝導及び輻射により第1～第3スプリング41, 42, 43の温度が上昇する。温度が次第に上昇して各スプリング41, 42, 43の逆変態温度 T_1 , T_2 , T_3 を越える毎に各スプリング41, 42, 43は順次逆変態を生じ、バイアススプリング50に抗して長さが増大し、弁体30を、第5図に示す如く、階段状に軸方向にストロークさせる。

第1～第3スプリング41, 42, 43の温度が T_1 ($=30^{\circ}\text{C}$) 以下の状態では切替シール部30aの位置は第1図に示す通りであるので、第2～第5ポート24b～24dは切替シール部30a上側の第1弁室B1を介して連通され、第1

ポート 24 a は他のポートより遮断されている。温度が上昇して T_1 を越えて第 1 スプリング 4 1 の長さが増大した状態においては、第 2 図に示す如く、切替シール部 30 a は第 2 ポート 24 b と第 3 ポート 24 c の間に位置し、第 1 及び第 2 ポート 24 a, 24 b が切替シール部 30 a 下側の第 2 弁室 B 2 を介して互に連通され、第 3 ～ 第 5 ポート 24 c ～ 24 e が第 1 弁室 B 1 を介して互に連通されるようになる。引き続き温度が上昇して T_2 ($= 50^\circ\text{C}$) を越え、第 2 スプリング 4 2 の長さも増大すれば、第 3 図に示す如く、切替シール部 30 a は第 3 ポート 24 c と第 4 ポート 24 a の間に位置し、第 1 ～ 第 3 ポート 24 a ～ 24 c が第 2 弁室 B 2 を介して互に連通され、第 4 及び第 5 ポート 24 d, 24 e が第 1 弁室 B 1 を介して互に連通されるようになる。なお、第 3 図の状態においては、第 1 スプリング 4 1 は第 2 図の状態よりも多少短くなる。更に温度が上昇して T_3 ($= 60^\circ\text{C}$) を越えれば第 3 スプリング 4 3 の長さも増大し、第 4 図に示す如く、切替シール部 30 a は第 4 ポート 24 a と第 5 ポート 24 e の間に位置し、第 1 及び第 2 ポート 24 a, 24 b が第 2 弁室 B 2 を介して互に連通され、第 3 ～ 第 5 ポート 24 c ～ 24 e が第 1 弁室 B 1 を介して互に連通されるようになる。



ル部30aは第4ポート24dと第5ポート25eの間に位置し、第1～第4ポート24a～24dが第2弁室B2を介して互に連通され、第5ポート24eは他のポートより遮断されるようになる。なお、第4図の状態においては、第1及び第2スプリング41, 42は第3図の状態より多少短くなる。温度T3以上の高温状態より温度が低下する場合は、以上と逆の作用により各ポート24a～24eは切り替えられる。

感温部ケース10が比較的低温の状態においては、各スプリング41, 42, 43の一端側41a, 42a, 43aは、感温対象である冷却水により直接加熱・冷却される感温部ケース10の底部12に直接接触し、あるいはその近くに位置するので、熱伝導及び輻射により底部12の温度が各スプリング41, 42, 43に速やかに伝えられ、応答性も良くなる。感温部ケース10が高温となれば第3スプリング43の一端側は底部12から離れるので底部12からの伝熱は減少するが、中央の放熱突起13との間の輻射及び対流により

熱交換がなされて加熱冷却されるので底部 12 からの伝熱の減少は補われ、応答性が低下することはない。

なお、以上の実施例においては形状記憶合金よりなるスプリングの数を 3 個とし、バルブハウジングのポート数を 5 個としたが、此等の数は任意である。また、弁体 30 の切替シール部の数も 1 個には限らず、この数を 2 個以上として更に複雑な切替機能を与えることも可能である。

4. 図面の簡単な説明

第 1 図～第 4 図は本考案による感温性複式切替弁の一実施例を示し、第 1 図は低温状態における全体の長手方向断面図、第 2 図～第 4 図は温度が上昇した各作動状態における全体の長手方向断面図、第 5 図は温度に対する弁体のストロークの説明図である。

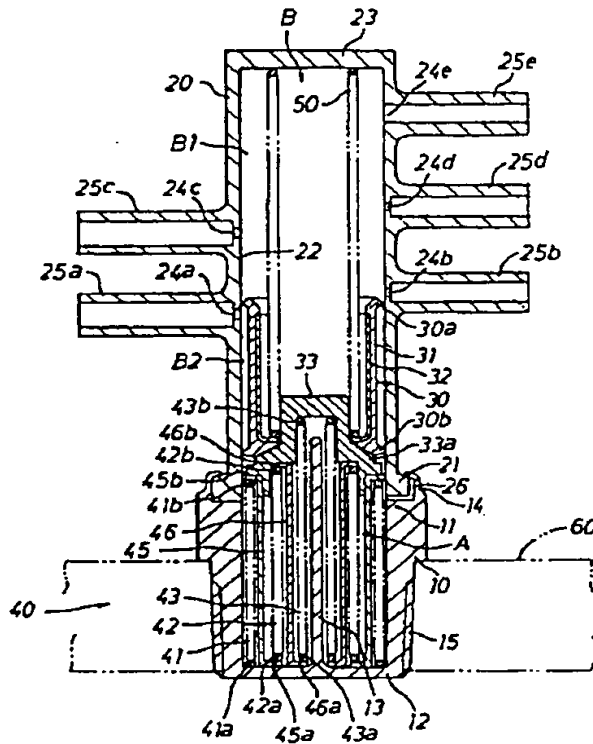
符 号 の 説 明

10・・・感温部ケース、11・・・開口端縁、
12・・・底部、13・・・放熱突起、20・・・
バルブケース、21・・・開口端縁、22・・・

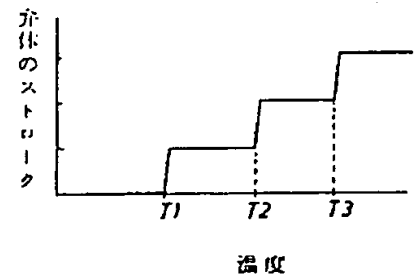
・内周面、24a～24e・・・ポート、30・
・弁体、30a・・・切替シール部、40・
・熱応動部材、41～43・・・形状記憶合金よ
りなるスプリング、41a～43a・・・一端側、
41b～43b・・・他端側、45, 46・・・
ガイド、45a, 46a・・・内向折曲部、45
b, 46b・・・外向折曲部、A・・・感温室、
B・・・弁室。

出願人 愛三工業株式会社
代理人 弁理士 長 谷 照 一
(外1名)

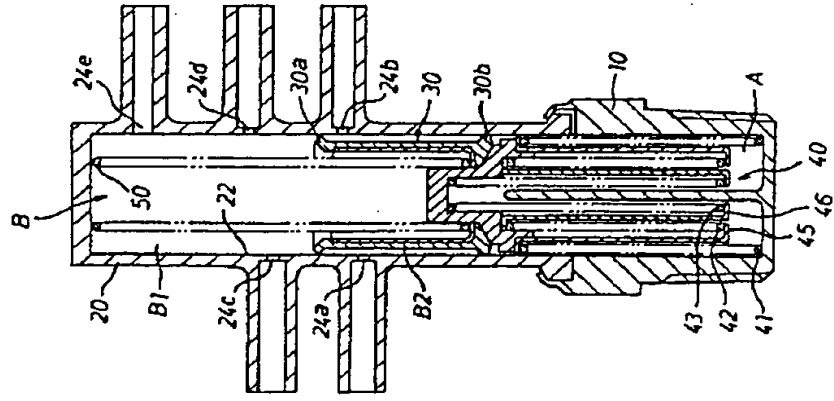
第 1 図



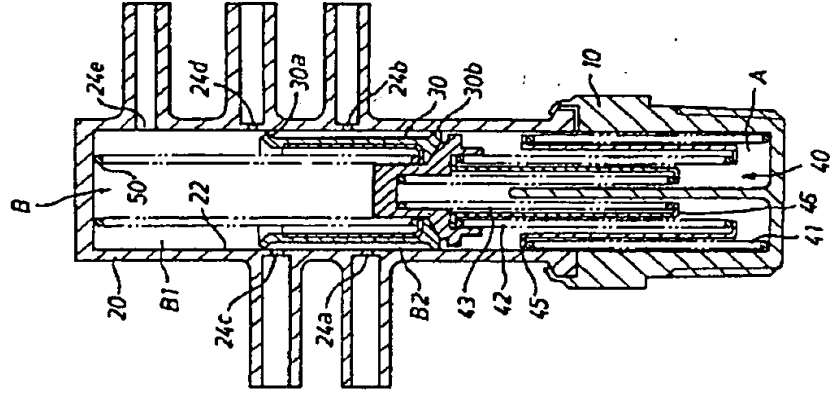
第 5 図



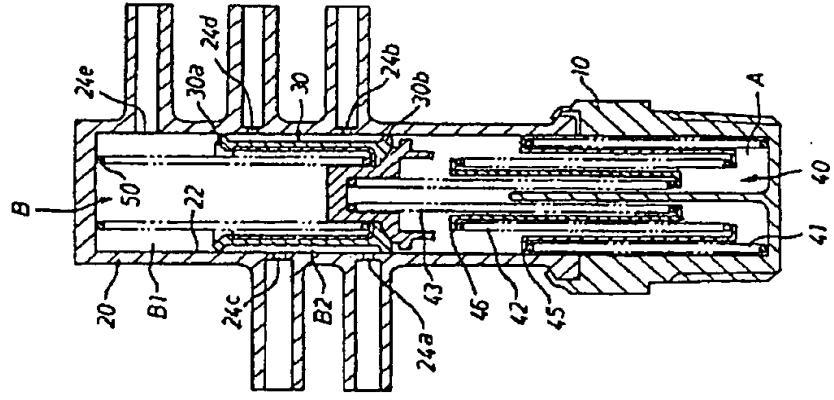
第 2 図



第 3 図



第 4 図



THIS PAGE BLANK (USPTO)